



# 民俗芸能と郷土芸能

—民俗芸能の保存継承をめぐる—

文化財保護審議会専門委員

植木行宣

## 1.

1991年の夏、鹿踊を中心に130余の芸能が一堂に集まるといううたい文句に惹かれ、友人5人と“北上まつり”へ出かけた。関西に住む者には東北はやはり遠く、足繁くは通えない土地である。鹿踊や田植踊・ケンバイをまとめて見る絶好の機会と思われ、準備をととのえ、心はずむ思いでその日を待ったことである。

滞在わずか3日間。実質1日半の見物ではおのずから見る数は限られる。効率的に要領よくスケジュールを組んではみたが、当然ながら細切れでは、見えるものも見えないのである。結果は惨憺たるものであり、最後は鹿踊とケンバイのいくつかにしぼって、やっと少々の結果をえる始末であった。研究者根性の浅ましさを改めて思い知らされたことだが、そこで民俗芸能をめぐる現代的問題を突きつけられもしたのである。

遠来の者ということでその時たまたま、地元のテレビ取材につかまった。感想を問われるままに田植踊の「門付け」というあり方にふれたところ、逆に問い返され驚いた。私どもの常識では、門付けはプロないしセミプロ的な外来の芸能者の行為である。地域住民による民俗芸能が祭りの領域の外に出て門付けすることはない。それがここでは常態なのである。ついそれが口に出たのであった。

文字では承知していた民俗芸能のあり方にみる東西の違い。門付けはそれを実感としてつきつけてきたのだが、いま一つの事柄がそれにダメをおした。まつりに参加した集団の多くがいわばクラブ的だという事実である。

基礎的なことがらを確認するため、例によってヒヤリングを試みるがどうにもピントが合ってくれない。どうして？。聞く相手が地域に根ざす祭り集団ではないからだと思ひ至るにはしばらく時間を要した。出演団体の過半は市民的有志の集まりであり、祭り集団だと無意識に前提する私の質問がかみ合うわけではないのである。130余はそうした団体を含む数にほかならず、しかもそれが次々に生まれ、まつりの活力ともなっているらしいのである。それらの団体の自己紹介によると、どこそこの芸能大会やイベントに何回出演したかが誇らしく語られ、その際のものらしい旗がステージを飾る。それは、そうした経歴がまつりへの参加資格でもあると思われるほどであった。過半の団体にとって、招かれ参加するそうした舞台こそが芸能継続の基盤となっており、そのことに何の違和感も存在しないのであった。





